

## 「モンゴルの鉱山町ナライハにおけるカザフのイスラームと文化の復興」

名古屋大学大学院環境学研究科研究員 石井祥子

モンゴル国は約20のエスニック集団が存在する多民族国家です。マジョリティはハルハと呼ばれるモンゴル系の人々で、人口の約70パーセントを占めています。少数民族の中で人口が最大なのが、カザフです。カザフは、イヌワシを使った狩りをすることで有名です。

モンゴル系民族の多くがチベット仏教を信仰する一方、カザフはイスラームを信仰して独自の文化を築いてきました。カザフ語を話し、若い世代はカザフ語とモンゴル語を操るバイリンガルも多いです。

モンゴル国の西隣にカザフスタンという大きな国がありますが、カザフはもともとカザフ高原を中心に遊牧をしていた人々です。モンゴルのカザフは、母国であるカザフスタンを離れて、モンゴルに生きるマイノリティです。

1990年以降、モンゴルでは計画経済、社会主義体制を放棄して、市場経済、民主主義へと移行しました。それに伴い、経済・社会・文化に渡って劇的な変動がもたらされました。カザフ社会では、経済的な変化に加え、イスラーム信仰、伝統文化、エスニック・アイデンティティが復活しています。そしてその復活の陰には、イスラーム諸国との関係強化があります。

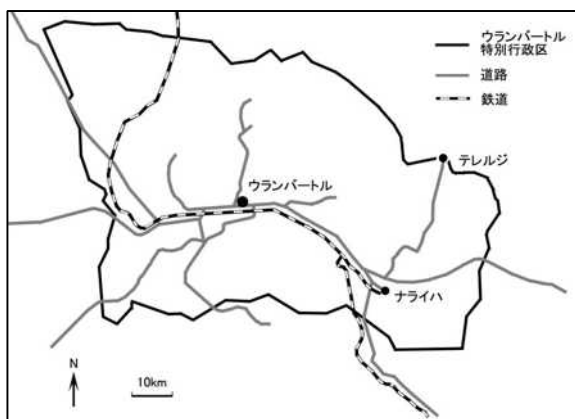


図1 ウランバートル市ナライハ地区

カザフの人々はバヤンウルギー県やホブド県など、主にモンゴル西部に多く住んでいます。その他、首都ウランバートル近郊にナライハという鉱山の町がありますが(図1、写真1)、そこにもカザフが住んでいます。社会主義時代に政府の指示によって、カザフが炭鉱労働者として移住したからです。私はこの炭鉱の町ナライハで調査をしてきました。ナライ

ハはウランバートルから南東36キロメートルのところにあります。ナライハ全体の人口は約2万4千人ですが、そのうちの25パーセント、約6千人がカザフです。

ナライハでは1900年代の初め頃から中国人が石炭を掘っていました。1922年に炭鉱工場になったのですが、そこがモンゴル国営となり、1930年代半ばに数人のカザフが炭鉱労働者としてナライハへ来ました。本格的にこの工場が稼働される1950年あたりから、政府の指示でカザフの本格的な移住がはじまりました。モンゴルのマジョリティであるハルハが、危険でつらい炭鉱の仕事を嫌がったために、カザフが呼び寄せられたのです。カザフの人々は、バヤンウルギー県やホブド県で、貧しい生活を強いられていました。そんな生活を抜け出すべく、ナライハへ向かいました。カザフは辛抱強く炭鉱で働いて、生活が楽になると家族を呼び寄せました。こうして、ナライハにカザフが集住するようになったのです。

写真2は、社会主義時代の、ナライハ石炭工場の様子です。1990年の市場経済化直後から、国内の企業のほとんどが経営破綻しました。ナライハの石炭工場も倒産し、カザフはみな失業しました。現在もナライハでは石炭の採掘が続けられていますが、かつての工場は倒産したままで、工場跡地を中心に個人で小規模に石炭が掘られている状態です(写真3)。

1990年の自由化後、社会主義時代に禁止されていたイスラーム信仰が復活しています。1993年にサウジアラビアからの援助により、この小さなナライハの町にモスクが建てられました(写真4)。それに伴い、宗教にまつわる様々なことが復活しました。割礼も再び行われるようになりました。割礼を行う際はトルコから医者がやってきて、ナライハの町を回ります。イスラームの五行「信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼」も徐々に復活し始めています。写真5は、金曜日の集団礼拝の様子です。モスクの中は非常にシンプルです。壁のくぼみは「ミフラーブ」と呼ばれますが、これがメッカの方角を示していますので、その方向を向いて礼拝が行われます。金曜礼拝に来る人は、毎年少しずつですが、増えているそうです。モスクでなく自宅で祈りを捧げる人もいます(写真6)。一日5回の礼拝を行うのは大変です。働いている人や学校に通っている人はなかなかできないのですが、お年寄りや熱心な信者は5回の礼拝を行っています。

はじめにも述べたように、イスラーム信仰の復興にはイスラーム諸国の援助の力が非常に大きいです。ナライハのような小さな町の少ない人口のカザフが、自分たちの力だけで宗教を復興させようというのはなかなか大変なのですが、イスラーム諸国の援助によって、宗教活動がスムーズに活性化しているという状況です。

ナライハの宗教復活に影響を与えているもう一つの要因として、民主化後のカザフスタンへの大規模な移住がありました。カザフスタンという国は、かつては旧ソビエト連邦の一つの共和国でした。ソ連が解体した時に、カザフスタンも独立しました。1991年のことです。その時にカザフスタン政府は、自国のカザフ人口を増やすために、国外にいるカザフの帰国を促しました。その際、モンゴルにいたカザフもカザフスタンへ行きましたが、その中の一部が再びモンゴルに帰ってきたりもしました。その後もモンゴル-カザフスタン間を行ったり来たりする人は多く、こうしたカザフスタンの往来によっても、イスラーム化が加速していきました。

宗教指導者の育成も、カザフスタンをはじめとするイスラーム諸国が関与しています。社会主義時代が終わった当初は、宗教指導者がいませんでした。そこで、サウジアラビア、トルコ、カザフスタン、パキスタンなどの国々がナライハの子どもたちを自国に留学させ、数年間イスラームを学ばせて宗教指導者に育てました。そのようにして学んだ人々が、ナライハでのイスラーム復興の重要な役割を担っているのです。

写真7の男性、K氏が持っているコーランは、トルコやサウジアラビアから贈られたものです。メッカに巡礼するための旅費の援助も、サウジアラビアは行っています。この援助により、ナライハから毎年一人、あるいは二人が巡礼に行きます。K氏は熱心なイスラーム信者で、一日5回の礼拝を欠かしません。メッカへの巡礼も2008年に果たしました。

写真8はK氏のご家族です。2011年8月の終わり頃でしたが、ちょうどラマダーンの時期で、断食中だったのですが、みなさんとてもお元気でした。ここに写っている赤ちゃんを除いたみなが断食を行っていました。「おなか空かないの？つらくないの？」と子どもたちに聞くと、「つらいんだけど、神様が守ってくれると思うと全然つらくないよ。」と明るい笑顔で答えてくれました。またお話を聞かせていただきたくて、2012年に再訪しましたが、K氏は残念ながらお亡くなりになっていました。日本の相撲が大好きで、「日本の力士は全員好き、私はみんな応援しています」と話してくれたかたでした。

カザフ文化も復興しています。民主化後の1996年、カザフの新年である「ナウルズ」が復活しました。ナウルズとは「太陽の祭」という意味です。カザフにとって、昼と夜がちょうど同じ長さになる春分の日が一年の区切り、元日になります。社会主義時代は、宗教や伝統文化が一切禁止されていて、ナウルズは単にスポーツ大会やコンサートが行われる日でした。民主化後には、カザフの伝統的な行事がナウルズで行われるようになりました。バヤンウルギー県ではイヌワシ祭が重要な行事として行われていますが、残念ながら、ナライハではイヌワシ祭は行われていません。ナライハではイヌワシを持っている人は一人しかいないからです。ナウルズで行われるカザフの伝統的な行事のひとつは、アイトゥスと呼ばれる歌合戦です。即興で音楽にのせて、歌を交互に歌います(写真9)。歌を競い合って、優れたほうが勝ちというルールです。カザフの伝統的なダブルという楽器の伴奏で歌います。さらに、ナウルズではカザフ相撲も行われます。ルールはモンゴル相撲とは異なっていますが、見ていて日本の柔道のような感じがしました。そして、競馬も行われます(写真10)。カザフ相撲とカザフの競馬には、カザフだけではなく、モンゴル系民族の参加も認めるようになりました。カザフ文化は内側だけに閉じているのではなく、外にも発信していこうということで、モンゴル人が参加しやすい相撲や競馬に参加を認めて、カザフ文化をモンゴル系の人にも知ってもらおうという努力をしています。

私はある家族のナウルズの食事会に招待されました。食事会が始まる前に子どもたちがダブル演奏を披露してくれました(写真11)。子どもたちは、このような伝統楽器の演奏や、カザフの踊り、カザフ語などを、年配の方々から教えてもらいます。

カザフの女性は、独特の模様の刺繍をします。刺繍だけではなく、服も作って売っています。それが非常に貴重な現金収入になるわけです(写真12)。刺繍をほどこしたラグでベッドや家の中を色鮮やかに飾り付けるのが、カザフのゲルの特徴です。自分ができることをやって、家計を支えるというケースが非常に多いのですが、刺繍をしたり、服を作ったり、小物を作ったりして一家を支えている女性はたくさんいます。自分の家、ゲルの中を飾り付けてカザフ文化を紹介する博物館にして、外国人観光客やモンゴル系住民に紹介している女性もいます。

以上のように、ナライハにおける宗教・カザフ文化の復興は、イスラーム諸国からの援助や故国カザフスタンとの関係強化などに支えられて少しずつ進行しています。



写真1 ナライハ地区の中心部



写真4: ナライハのモスク



写真2 社会主義時代のナライハ国营炭鉱（出典：1974年発行ウランバートル写真集）



写真5: 金曜日の集団礼拝の様子



写真3 石炭工場跡地で小規模に石炭が採掘されている



写真6 自宅で礼拝を行う人々







写真 7：2008 年にメッカに巡礼したK氏



写真 10：カザフ競馬で優勝した馬



写真 8 ラマダーン月の断食中のK氏ご一家



写真 11 ナウルズの食事会で披露されたドンブル演奏



写真 9 カザフの歌合戦アイトゥスの様子



写真 12：刺繍をするカザフ女性